

---

# 弱に交わる

shibito

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
翳に交わる

【Nコード】  
N0057BA

【作者名】  
shibito

【あらすじ】  
大学のサークル旅行の下見のため、親友の男子生徒とともに恩師の実家である雪の中のお屋敷を訪れた、女子大生の安堂夏海。彼女がそこで体験する、淫猥で不可思議な出来事。

## 交わってはいけない部屋

私と輔が、雪深い山奥のお屋敷にたどり着いたのは、初冬の空が暗く翳りつつある、日暮れ時のことだった。

凍りついた雪の中、江戸時代の武家屋敷を思わせるような立派な門の柱に、案外慎ましやかにかけられている、「人間」という名の表札を確認し、私達は中に入った。

門扉から連なる、植え込みに囲まれた小道を、飛び石伝いに歩いて玄関の戸口までゆくと、磨き込まれて黒光りしている上がり框の手前で、三十半ばぐらいの和服の女が、静々と三つ指ついて出迎えた。私は、髪をひつつめ、地味にこしらえている女の姿に眼を凝らした。

「××大学の安堂夏海あたちなつみです。人間先生には、大変お世話になっておりました」

女から眼を逸らさずに、頭をさげた。女は柔らかく微笑むと、

「吉村紫よしむらゆかりと申します。当家の雑務を任されております。ご用の向きがございましたら、何なりとお申しつけくださいませ」

そう言って、改めて座礼をした。……どうやら、お手伝いさんだったらしい。気品ある物腰にふさわしく、声音は穏やかで言葉遣いも丁寧なだけでなく、イントネーションにこの地方特有の訛りを感じる。きつと土地の人なのだろう。

「同じく、××大学の、天知輔あまちたすくです。今夜一晩、どうぞよろしくお願いたします」

隣に居た輔が、はきはきと好青年ぶった自己紹介をした。

輔は、私と同じ二年生だけど、一浪していたから、年齢は一つ上になる。けれど、童顔な上に子供っぽい性格をしているので、あまり年上って感じはしない。実際、連れ立って歩いていると、私の方がお姉さんに見られるほどのだ。本人も多少は気にしているらしく、こうして初対面の人と話をする時には、少しでも大人びて見

られるよう、マナーには気を配っている様子なのだった。

「この度は、人間先生のご厚意に甘えさせていただき、誠に感謝しております」

輔は、まるで就職試験の面接の練習時のように、しゃっちょこばつてお辞儀をした。

「いいえ。お寒い中を、さぞお疲れになったことでしょう。まずはおありがとうございます」

吉村紫は、ささっとスリッパを用意し、私達を促した。

大学で、スポーツ系・なんでもありのお遊びサークルに所属している私と輔は、今年の冬の、スキー旅行の幹事を任されていた。幹事の使命はただ一つ。可能な限り安あがりな宿を見つけ、我がサークル年間二大イベントの一つであるスキー旅行を、格安で済ませるべく尽力すること。ちなみに、二大イベントのもう一個は、夏のスキューバ旅行だ。

そんなわけで、毎回幹事の順番が廻ってきた者は、旅行の一ヶ月くらい前から、宿探しに奔走するのが恒例となっていた。学業やバイトの片手間に、結構大変なお仕事なんだけど、私は、去年やったスキューバ旅行の幹事以来、二度目の経験だから、もう慣れたものだった。

それに今回は、宿の当てもすであつた。私の通う研究室の、元・講師、人間圭樹いんまけいじゅがその当てだった。

人間先生は、今年三十歳になつたばかり。長身で、精悍なイメージの男性で、見た目に違わず、アクティブでスポーツも万能ときている。研究室内では目立って格好良かったので、女子の中にも、密かに憧れてるようなのが何人も居た。

実を言うと、私もその内の一人だった。もつとも私の場合、ただ憧れるだけでは済まसानかつたけど。

人間先生と私は、かつて恋人同士だった。

かつて、ということだから、当然今はもう終わっている。終わったのは今年の秋口。半年ちよつとの付き合いだった。

論文に没頭するために、大学を離れて東北にある実家に戻るから。というのが、彼の言い分だった。だけど私は知っていた。人間先生は、実家に奥さんを置いて東京に来ていた。要するに彼は、奥さんのところに戻ったのだ。

それで、人間先生の実家が、東北の山の中にある大きなお屋敷で、なおかつ、スキー場からもそう遠くはないということ、以前小耳に挟んでいた私は、さっそく連絡を入れたのだった。サークルの旅行で、十人ぐらいで泊まれる格安の宿を探してるんだけど、先生のところは頼めない？と。

別れて間もない元カノが、そんな風に連絡してきた場合、難色を示すのが普通の反応だろうと思う。不倫だったら尚のこと。ところが人間先生ときたら、難色を示すどころか、二つ返事でOKしてくれたのだった。

元々、人間先生はそういう人だった。研究者としては切れ者の部類に入ると思うんだけど、どっかこう、抜けてるっていうか、浮世離れしているというか。つまりは変人なのだ。まあ、今の私にとってそれは、都合のいいことではあったけれど。

で、いつでも好きな時に遊びに来たらいい、という人間先生のお言葉に甘え、大学の悪友にして弟分の輔を誘い、サークル旅行に先立って、週末のみの下見旅行と洒落込んだわけだった。男連れで来たのは、その方が先生も安心できるだろうという、私なりの配慮だ。私と輔は、吉村紫に案内されて、長い廊下を渡って行った。

「さあ、どうぞ。こちらの部屋をお使ください」

いくつかの角を曲がった後、吉村紫に通されたのは、十畳ばかりの和室だった。入って真向かいの一面が白い障子。左側は床の間で、右は襖で閉ざされている。部屋の中央にはちゃぶ台と座椅子が用意されていて、ちょっとした旅館の一室みたいなこしらえになっていた。

「おー、暖けえ」

輔は、部屋の片隅に置かれたファンヒーターを目ざとく見つける

と、ちょこちょここと駆け寄って手の平をかざした。私は部屋を横切り、障子を開けた。障子の向こうは、僅かな板の間を挟んで、ガラスのサッシになっていた。外は、雪化粧を施された庭園だ。すでに日は落ちていて、暗く沈んだ風景の中で、雪明りだけがぼっかりと明るく見えた。

「こちらの襖を開けると、お部屋が広く使えます」

吉村紫の声に振り返る。見ると、部屋の襖はすでに開け放されていて、襖向こうの部屋が見通せた。向こうも、こっこの部屋と変わらない広さがあった。

「ははあ、これなら、寝る時に男女で部屋を分けることもできるし、便利で良さそうだなあ。ありがとうございます、吉村さん」

輔は、屈託のない口調で吉村紫に礼を言った。吉村紫は、控えめな微笑を浮かべてかぶりを振った。

「全て、圭樹様のお計らいですから。わたくしは何も……」

「そういえば、人間先生や奥様は、どちらにいらっしゃるのでしょうか？」

ふと思いついて私は訊いた。私と輔が今日ここに来ことは、すでに伝えてあつたはずだ。なのに、人間先生はまだ姿を見せない。彼の奥さんもだ。

私の問いに、吉村紫は、困ったように俯いた。

「申し訳ございません。実は、圭樹様は今、麓の街にある大学に行っておりまして」

「大学、ですか」

「ええ。東京の大学を辞めてから、圭樹様は地元の大学で、非常勤の講師をなさっておいでなのです。それで、今日も……もちろん、お二方が今日いらっしゃることはご承知のほうですから、今夜中には戻られるかと。それで、奥様の方ですが」

吉村紫は、私が開けた障子の方に眼をやりながら続けた。

「奥様はその、今日は体調が優れず、臥せておりました」

「えっ？ 先生の奥さん、ご病気なんですか？」

横から口を出した輔に向かい、吉村紫は、曖昧に頷いて見せた。  
「元々、あまりお躰の丈夫な方ではないものですから。もうずっと、入院したり退院したりを繰り返しておいでなのです。そんなわけですので、ご挨拶も叶わぬようでした、申し訳ございません」  
「とんでもない。こちらこそ、そんな大変な時に押しかけてしまつて」

畳に手を突いて頭をさげようとする吉村紫を、輔が、恐縮した素振りで見しとどめた。

「どうか、僕らのことはお構いなく。お邪魔にならないよう、適当にやっていますから」

そんなことを言いながら、輔は吉村紫の手の甲に、さりげなく触れた。吉村紫は、ちょっとだけ肩を震わせたが、感情を面には出さず、慎ましやかに手を引つ込めた。

それから私達は、すぐさまお風呂に案内された。大邸宅だけあって、広々としたお風呂だったけど、さすがに、旅館よろしく男湯と女湯があるわけではないから、私達は順番に入浴することにした。じゃんけんの結果、輔が先に入ることが決まり、私は部屋で待つことになった。

部屋に戻るべく、廊下を歩いている途中、吉村紫は、遠慮がちに口を開いた。

「あのう……安堂さんは、天知さんとは、随分親しくいらっしやるのでしょうか？」

「へっ？」

私は、素っ頓狂な声を出してしまった。つまり、私と輔が付き合い合っているのか、と訊いているのだらうけど、けど、なんでこの人、そんなことを知りたがっているのだらう？

「ああ、申し訳ございません、立ち入ったことを伺ってしまつて……ですが、その……」

吉村紫は足を止め、意を決したように私を見た。

「お願いがございます。今宵……お休みになる際には、襖を隔てた

別々の部屋になさって欲しいのです。つまりその、天知さんと、同衾はなさらないでいただきたいと」

私はまじまじと、吉村紫の奥二重の眼を見返した。

「それって、今夜輔とはセックスするなっことでですか？」

私はずばり言い返すと、吉村紫は、年甲斐もなく頬を赤らめ俯いてしまった。なんだか、悪いことをした気になってしまう。

私と輔は、大学入学以来の腐れ縁だけど、お互いを異性として意識し合ったことなんざ、今まで一度だってなかった。だから、たとえ同じ布団で寝たところで、セックスしちゃう可能性は限りなくゼロだと思う。でも、それをはつきり言ってしまうのは、ちよつとためらわれた。だって、今回私が輔をここに連れて来た理由は、人間先生に対し、私がもう以前のことなんて気にしていない、もう別の男が居るんだって、そう匂わせるのが目的だったから。輔との間に何も無いってばれちゃったら、元も子もないのだ。だから、私は言った。

「私達、宿をお借りする立場ですから、お言いつけには従います。

先生のお宅でふしだらなことをするのも、気が引けますしね」

私の返事を聞いて、吉村紫は、心底ほっとしたようだった。

「ありがとうございます。どうかご理解くださいませね。あそこの部屋でそういった行いに及ばれますと、その、少々困ったことになりますので」

「あそこの部屋が、駄目なんですか？」

思わず私は聞きとがめた。このお屋敷でセックスするな、ではなく、あそこの部屋でするのが駄目とは。いったいどういうことなのだろう。

返事を待つ私の前で、吉村紫は、「しまった」とでも言うように口元を手で覆った。あまり突っ込まれたくないことだったのか。私は、さらに問い質そうとしたが、

「それでは、わたくしはこれで。お風呂が済みましたら、内線でご連絡ください。お夕飯の仕度をいたしますので」

そう言っで、逃げるような小走りで行って行ってしまった。  
廊下に独り残された私は、ぼかんと口を開けて、お太鼓結びの背  
中が遠ざかるのを見送るばかりだった。

## 黒衣着物の女の子

「エッチ厳禁の部屋か。何なんだろうな、いったい」

私の斜向かいにごろんと横になった輔は、満腹しきった気だるさを、声に滲ませそう言った。

二人ともにお風呂を済ませ、吉村紫が部屋に用意してくれた夕飯をあらかた平らげた後、私は輔に、例のことを話して聞かせていた。輔は、天井を見あげて暫しぼんやりしていたけれど、ふいに、何かを思いついた顔で、ぱつと寝返りを打ってこちらを向いた。

「ひよつとしたらさ、この部屋って出るんじゃない？ 俺、ネットの怪談サイトで見たことあるんだ。ある旅館の離れで、カップルが姦チャつてると、押入れの中から、眼を潰された女の幽霊が這い出て来て

……」

「この部屋、押入れないじゃん。そもそもここは、旅館じゃないし」  
私は、素っ気なく言い返した。

「何だよう。せつかく人が盛りあげようとしてるのに」

輔は、タコのように唇を尖がらせてぶーたれる。けれど、すぐに気を取り直して起きあがると、私の真横に座って、肩を抱き寄せた。

「じゃあさ、とりあえず、試してみねえ？ ここで姦チャったら、何が起こるのかをさ」

にやにやと笑いながら、私の脇の下に素早く手を入れ、セーターの上からおっぱい揉んできやがった。私はため息一つつくと、輔のちっちゃい鼻を、ぎゅうつとつまんでやった。

「ひ、ひてててて。はにひやがんだお、はなへ、はなへ！」

「日本語喋れっつーの、この小童め」

私は、つまんだ鼻ごと輔を突き飛ばし、胸の上で腕組みをした。

輔は無様にひっくり返り、赤くなつた鼻をさすりながら、涙を浮かべた恨みがましい眼で私を睨んだ。

「へっ、冗談に決まってるんだろ。誰がお前みたいなの、凶暴でガキ臭い女なんか……こつちから願いさげだつっの」

輔みたいなのに、飲み屋に行くと、高確率で年齢証明を求められるようなクソガキに、ガキ呼ばわりされるのは心外だったけど、でも、彼の性癖を鑑みれば、それもやむないことだった。

なぜって、輔は根っからの熟女マニアだったから。高校時代、バイト先で出会った、四十過ぎのパートのおばちゃんに童貞を奪われたのだそうで、それがトラウマになったのかなんのか、とにかくそれ以来、年増一本槍なのだそう。下は二十八歳以上、上は、場合によっては、六十ぐらいでも全然いけると豪語する彼から見れば、二十歳そこそこの私なんざ、青臭くて話にもならないってところだろう。まあ、そんな彼だからこそ、私も、男女を意識しない、純然たる友人として、付き合っていられるわけだけでも。

輔の嗜好からしたら、私よりむしろ、あの吉村紫なんかがストライクなわけで、実際、さつきちよっと粉かけたりもしていたし、あれはどうなの、と水を向けると案の定、まんざらでもなさそうな感じなのだった。

「着物の女って、やっぱりそられるもんがあるよなあ。うなじとか、袖口から覗く白い腕とかさ。姦れるもんなら姦りたいね」

「そんなこと言っちゃって。あんた、着物の脱がせ方なんて、知ってるの？」

「日舞のお師匠さんと付き合ってた時に教わったけど、忘れてるかなあ。帯さえ解ければ、だいたい何とかかなると思うんだけど」

なんて、けしからん会話を楽しんでいたら、当の吉村紫が、食器をさげにやって来たので、私達は口を閉ざした。

「ああ、そうそう、安堂さんのお荷物が届いているのですが、こちらにお運びしてよろしゅうございますか？」

吉村紫は、ふと思いついたようにそう言った。お願いしますと答えると、彼女はすぐに、宅配便の札のついた、スキーバッグを抱えて戻って来た。

「何お前、スキー板なんか送って来てたの？ まさか、これからナイタースキーにでも出かけようってのか？」

呆れ顔で輔は言った。私は、ひらひらと手を翳して否定した。

「まさか。もうお風呂も済ませちゃったし、だいいち今日はバスで来たんだから、足がもうないじゃない。明日の朝からよ。せつかくここまで来たんだから、ゲレンデの調子も見ときたいじゃないの」「つつたつてお前、昼には列車に乗って東京帰るんだぞ？ ゲレンデに居られるのなんて、せいぜい二時間足らずってところじゃないか？ それだけのためにわざわざ」

お前も好きだなあ、と肩をすくめる輔を尻目に、私は大きめのスキーバッグを、隣の部屋に運んだ。

「明日早くお出かけになるんですしたら、今日はもうお休みになりませんか？」

吉村紫はそう言ったけど、腕時計に眼をやれば、まだ七時を廻ったばかりだった。宵の口もいいところ。到底眠れるもんじゃないだろう。それとも、こんな田舎の山の中ともなると、日暮れと同時に寝てしまうなんて、そう珍しいことでもないのだろうか？

「そうですね、さすがにまだ……それに、人間先生にもご挨拶しておきたいですから。あのう、何時ごろお戻りになるでしょう？」

遠慮がちにそう尋ねると、吉村紫は、少し首を傾げ、考える素振りを見せてから答えた。

「そうですね。特に何もなければ、九時ぐらいには……けれど、お仕事が差し迫っている場合、夜中の一時二時になることも、珍しくはございません。なんでしたら、電話で確認いたしましょうか？」

どうしようかと、私も少し考えた。吉村紫に訊いて貰わずとも、自分でケータイにメールを入れるって手もある。けど、どちらにしてもあまり得策ではない気がしたので、私は首を横に振った。

「いいえ。何だか早く帰れって催促するみたいで、申し訳ないですから。十時ぐらいまで待って、お戻りにならないようなら、お先に休ませて貰うことにします」

「かしこまりました。それでは、お布団の用意だけ、先にさせていただきますね。その間、お二人は、書庫でもご覧になっていらしてはいかがでしょう？ 圭樹様の集められた、珍しい本がたくさんございますから、学生の方には興味深いのではないかと。場所は……」

そう言つて、吉村紫は、書庫とやらへの道筋を、丁寧に教えてくれた。私と輔は、顔を見合わせた。

「面白そうですね、でも、僕らみたいのがお屋敷の中を勝手に歩き廻ったら、ご迷惑ではないですか？」

そう尋ねたのは輔だった。吉村紫は、鷹揚な笑みを浮かべた。

「このお屋敷は、本家から圭樹様お一人のために宛がわれたものでして。住まっているのも、圭樹様の他は、わたくしと、あとは奥様しかいらっしやいません。ご自由になさっても、差し支えはございませんのよ」

私と輔は、再び顔を見合わせた。この広大なお屋敷に、人間先生を含めた三人だけしか住んでいないという事実も驚きだったけど、吉村紫のこの感覚にも、少々面食らった。ざつくばらんといおうか、これもまた、田舎の人特有のものなのか？

はたまたこれは、このお屋敷内での吉村紫の立場が、私が思っていたよりも、ずっと大きいものであることの、証なのかもしれない。お屋敷のことを全て取り仕切っている様子だし、下手をすると、主人である人間先生よりも、実質的な立場は上なのかも。人間先生はかなりのんきなお人だし、ありえないことではない気がした。

だとすると、この吉村紫こそが、人間先生の実質的な妻だという可能性も出てくるわけだ。

私は、吉村紫の白い顔をじっと見つめた。化粧も控えめな、俯き加減のその顔からは、何の感情も読み取ることができなかった。

浮かびあがった疑念を、いったん胸の底に沈め、私は輔とともに、教えられた書庫に向かった。こんな山奥に来てまで勉強したいわけではなかったが、差し当たって他にすることがないからだ。

それに、正直なところを言えば、こうして屋敷内をうろついている

れば、人間先生の奥さんと会える可能性も出てくるとも思った。人間先生と婚姻関係にある女。やはり、一度は会っておきたい。

「ああ、言い忘れておりましたけど」

廊下を歩き始めたところで、吉村紫が、後ろから呼びかけてきた。「申し訳ございません。屋敷内はご自由にご覧になつて構いませんが、二階と、離れに続く渡り廊下の方には、近づかないようお願いいたします。二階では奥様がお休みなのと、あと、渡り廊下の方は、老朽化していて危険なものですから」

……なんか、さつそく釘を刺されてしまった感じだ。微妙な気持ちになつたけど、そんな感情はおくびにも出さず、私はにっこり笑つて見せた。

「わかりました。気をつけますね」

私の返事を聞くと、吉村紫は、安心顔で廊下を戻つて行つた。

「輔、どうしたのよ？」

輔の奴が、吉村紫の後姿を見つめたまま、動かないので呼びかけた。輔は、きよとんとした顔で私を見返したけど、その顔が、だらしない笑顔に崩れた。

「夏海、書庫にはお前一人で行け」

そう言つて、輔は廊下の先を見た。吉村紫のお太鼓の帯が、ちょうど突き当たりの角を曲がつて消えてゆくところだった。

「ねえ、あんたまさか」

私に皆まで言わず、輔は走り出していた。曲がり角の向こうから、声が響いた。

「紫さん、僕も布団を運ぶの手伝います」

私は呆れて肩をすくめた。どうやら輔の奴、本気である年増を口説くつもりらしい。

「ふんだ。勝手にしろつつの」

独りごちて、長い廊下を独り歩き始めた。あの手の、お上品ぶつた和服美人なんてえのは、案外好き者だったりもしそうだけれど、それでも、輔みたいなガキ臭い男の手に負えるものだから、見ものだ

と思った。私はジーンズのポケットからケータイを取り出すと、輔宛に簡単なメールを打つといた。

『どんな首尾だか、後で報告しなさいよ^^』

吉村紫に教えられた書庫は、廊下の一番外れにあるはずだった。

真つ直ぐ行つて、突き当りを右に曲がる。曲がったとたん、急に空気が冷たくなつた。こう広いと、暖房もすみずみまでは行き渡らないのだろう。心なしか、照明までも薄暗い廊下を少し歩いた先に、ようやく書庫の入り口らしき扉が見えた。妙に仰々しい、鉄の飾り模様がついた、木の扉だ。

扉の先、廊下の突き当たりは、裏口になっているようだった。重たそうな板戸が少しだけ開いていて、そこから冷たい空気が入ってくる。とっさに手をかけ閉めようとしたが、もしかすると、換気のためにわざと開けているのかもと思ひ直し、そのままにしておいた。そして、私は書庫に入った。

書庫は、床も壁も板張りの殺風景な部屋だった。でかい本棚が三つ、壁に沿って置いてあり、いずれもカビ臭い本で溢れ返っている。ちよつとした図書館が開けそうな蔵書の数にも驚いたけど、私を最も驚かせたのは、本なんかじゃなかった。部屋の真ん中に突っ立っている、黒髪に黒い着物の女の子の存在だった。

「あ……え？」

言葉を失い、部屋の入り口に立ち尽くした私を、女の子は、三白眼の鋭い瞳で見据えた。年の頃は、十五歳前後といったところか。長く伸ばした重たげな黒髪は、前髪を眉の上でぱつんと切り揃えており、まるで市松人形のようなだ。黒髪と黒い着物に包まれた小さな顔は、陶器のようなつるんとした白さで、一瞬、宙に浮かぶ生首のように見えて不気味だった。もっと普通の格好をすれば、そこそこに可愛い子だと思うんだけど……。

「誰？」

女の子の、小さくかすれた声が問う。それはこっちの台詞だと思つたけれど、とりあえずは答えることにした。

「私は安堂夏海。東京の大学で、人間先生に教わっていたの」

「人間先生？ 圭樹のこと？」

小首を傾げて、女の子は言った。私は頷いた。人間先生を？ 圭樹？ なんて呼ぶところから察するに、親戚の子か何かなのだろうか？

「ねえ、あなたは」

今度は私の番だろうと、問いかけようとした私の口元に、細い指先が伸ばされた。女の子の手が、私の口をしつかりと塞いでいた。

「静かに」

さくらんぼのような唇が言った。

「私、ここに居るのがばれるとまずいの」

女の子は、見かけによらぬ強い力で私の手首を掴むと、廊下を伺いつつ書庫を出て、例の、裏口の板戸を引き開けた。板戸の外には、簡素な歩廊が続いていた。柱と屋根のみに守られた、剥き出しの廊下は雪の庭を横切り、向こう側にある、小さな黒い建物へと繋がっているようだった。

ひよっとしたらこれ、吉村紫が行くなと言ったた渡り廊下なんじゃないの？ そう思い至った時にはすでに遅く、私は女の子に連れられるまま、廊下を渡りきって、離れの中へと引つ張り込まれてしまった。

## 見えない誰かに

離れの中は、明かりが落ちていて、真っ暗だった。女の子は、手探りで部屋の中を進み、窓にかかったカーテンを開けた。雪に覆われた庭の向こうに、ぼんやりとした明かりが見えた。屋敷本館の明かりだろう。

屋敷の明かりと雪明りが窓から入ったことにより、暗かった部屋にも僅かな視界が開けた。ここは、八畳ほどの寝室のようだ。部屋の真ん中に、こんもりと高く布団が敷いてあり、それを取り囲むように、勉強机や整理筆筒、鏡台などが並んでいる。ちょっと古風ではあるけれど、当たり前の少女の部屋って印象だ。

暖房もない、寒い部屋の片隅で、私は両手を擦り合わせた。女の子は窓の方を向いたまま、何もせず、何も言わない。

「あの……」  
痺れを切らし、おずおずと呼びかけると、女の子はぱっと振り返った。窓からの逆光で、翳に沈んだ顔の中、二つの眼の光が異様なほど強かった。

「私も、ほんとはそういうのがいいの」  
女の子が、私の衣服を指さして言った。何のことかと己の躰を見おろした。アイボリーのセーターに、ブルージーンズ。女の子が羨むようなものなど、何も身に着けちゃあいない。

私のリアクションなどまるで頓着しない様子で、女の子は腕を広げ、着物の袖をひるがえして見せた。

「これ、紫が着させるんだけど、ほんとは私、こういうのは嫌い。めんどくさいから。でもあいつ、黒い色は感覚を遮るって信じてるんだ。ほんとは逆なんだよ。黒は感覚を吸い込むの。だから、こんなのは着ない方がいいんだ。裸の方がまだまし」

そう言うなり、女の子はいきなり着物の帯を解いた。呆気に取られる私の前で、彼女はさっさと細い帯を、黒い着物を床に落とし、

薄いピンクの襦袢のみの姿になった。

「あなた……何者？」

そう尋ねたのは私だった。何しろ、ここまでずっと彼女のペースだ。私の意思を無視され続けていることに、若干苛立っており、それが声音にも滲んでいた。

襦袢の肩にかかる髪の毛を、さらりと？きあげた女の子は、くすくすと小さな笑い声をあげて、布団の上に身を投げ出した。絹のカバーに包まれた柔らかそうな布団は、細身の躰を受け止めて、ぽふんと軽く弾んだ音を立てた。

「圭樹を東京に連れて帰って」

うつ伏せに、掛け布団を抱き締めながら、私の問いかけを全く無視して、女の子は言った。

「そもそも、私がこんな離れに隔離されたのだって、圭樹がこの家に戻って来ちゃったせいなんだ。いい迷惑だよ。子作りなんて、東京でだってできるでしょうに。美也子が、圭樹と一緒に東京に行けばいいんじゃない。病気だなんて言っちゃってるけど、病気の内に入らないでしょ、あんなの。そのことみんなわかってるはずなのに。みんなが甘やかすから、あいつはいい気になって、それで」

「ちよ、ちよつと待ちなさいっての」

堰を切ったようにまくし立てる女の子を、私は慌てて押しとどめた。こんな、わけもわからないままに、言葉のマシンガンを、盲目撃ちよろしくぶつけられるのはかなわない。

けれども、一見脈絡のなさげな彼女の台詞の中には、興味深い情報がちらほらと紛れ込んでもいた。特に、人間先生が帰郷した本当の理由がわかったのは、思わぬ収穫だった。まさか子作りのためとは、ね。なるほど、田舎の旧家のお坊ちゃんともなると、そんなことのために、都会での仕事も生活も捨てなきゃならないってことなのか。ご苦労様と言おうか何と言おうか、馬鹿馬鹿しいったらありやしない。

それにつけても、この女の子は、いったい何なんだろう？ 吉村

紫は、この屋敷に住んでいる人間は、彼女自身を含めた三人だけしか居ないと言っていたはずだ。つまり、この女の子の存在を、私と輔に隠していたわけだ。でも、それはなぜ？ 黒い着物を着付けられ、こんな離れに逼塞せられ、屋敷内への出入りさえも禁じられているらしき彼女。

「あなた、この家の娘さんじゃないの？」

「お前だって、ほんとには圭樹を連れて帰りたいんでしょう？ 私、知ってるよ。お前は圭樹を手に入れたがってる。私は、別にそれでも構わないんだ。それに、あのひ弱な美也子なんかより、お前の方が図体でかいし、丈夫な赤ちゃん産めそうじゃない。どうせ、遠縁とはいえ、美也子だって本家と血の繋がりはないんだから。だったら、よそから来た赤の他人に産ませたって、同じことなんだから」

女の子は、またも私の問いかけを無視した。確かに、身長が百六十八センチもある私は、日本人女性としては「図体がでかい」部類に入るのかもしれないけど……って、そんな話はどうでもよくて。

「私、人間先生とヨリを戻しに来たんじゃないよ！」

自分でも、予想外に大きな鋭い声が出た。女の子もちょっとは驚いたようで、切れ長の眼を丸くして私を見つめている。

「そうなの？ それじゃあ、あれは……」

女の子の視線が、窓の方に向いた。今気がついたけど、この窓と庭を挟んで、真向かいに見える明かりは、どうやら私と輔に宛がわれた、あの部屋の明かりのようだった。へえ、意外とすぐ近くなんだなあ。そんなことを思いつつ、向こうの明かりに眼をやると、閉ざされた障子の中で、人影が揺らめくのが見えた。あれは輔か、それとも、寝床の用意をしている吉村紫なのか。

その時、私の視線に気がついたかのように、向こうの部屋の明かりが、ふつと掻き消えた。窓から入る明かりの量が減り、離れの部屋の暗さが増した。

「あ、駄目……」

布団の上から、かすれた声が聞こえた。暗い中、眼を凝らせば、

女の子が仰向けになり、かっと眼を見開いていた。どうしたのだろう？ どこか、具合でも悪くなったのだろうか？

「出て行って」

天井に眼を向けたまま、虚ろな声音で女の子は言った。私を見ようともしないばかりか、手も足も投げ出して、微動だにしない。

「何？ 大丈夫？」

私は、女の子の傍らに膝をつく。すると、襦袢の袖がひらめいて、胸元に何かをぶつけられた。甘い匂いのするそれは、クッキーか何かのお菓子が詰まっていると思しき、四角い缶だった。

「早く出てけつたら！」

女の子は、腕だけを動かして、手近にある小物を次々と私に投げつけた。結構色々飛んで来るので、私は閉口し、勢いに押されて戸口まで後ずさった。

そこで、女の子の攻撃の手が止まった。中途半端に何かを掴みかけていた手が、はたりと布団の上に着る。

おそろおそろ、首を伸ばして女の子の顔を覗き込んだ。彼女は硬く眼を瞑り、唇を半開きにして、浅い呼吸を繰り返していた。耳を澄ませば、呼吸に混じって微かに喘ぐような声も聞こえる。躰が熱くなっているのか、小鼻には、細かな汗の粒まで浮かんでいるようだった。どうもこれは、ただごとではない。

「どうしたのよ、ねえ、ちょっと」

私は、女の子の小さな肩を揺すった。すると女の子の上半身が、何の前触れもなしに、すつと起きあがった。私は驚き、手を引いた。女の子の身の起こし方が、あまりにも不自然だったからだ。自分の力で起きたようには見えない、あたかもそれは、誰かの手で引き起こされた風だった。

中途半端に、斜めに躰を起こしたままで、女の子は薄っすらと瞼を開いた。眼に見えない、透明な誰かを見あげるように。透明な誰か 自分の発想にぞつとした。確かに、この女の子の姿勢は、透明な男の腕に身を委ね、今まさに抱かれようとしている女の姿、そ

のものだったから。

## 翳と交わる・前

離れの部屋の中には、冴え冴えと蒼い光が射していた。屋敷の明かりが落ちるのと入れ替わりに、月が出たのだろう。今夜は満月だったはず。雪が月明かりを照り返して、いつそう明るくしているのだろうか。

凍りつくほど妖しい月の光を浴びて、女の子は、夜の魔物に変身しつつあった。

さつきまでの、あどけなく、青いばかりで味気ない、形を成したばかりの果実のように頑なだった印象が鳴りを潜め、急速に熟成して、汁気を帯びたかのような。

苦しそうな、無理な後傾姿勢を保ったままの女の子は、うつとりした表情を月光のもとに晒し、半開きの唇の中から、桃色に濡れた舌先をちよろちよると覗かせていた。

キスしてるんだ……。妙になまめかしい唇や舌の蠢きに、私はそんな想像をした。女の子は、切なげに表情を歪めながら、伏せたまつげを揺らめかせ、ひどく器用に見えない唇を吸い、嚙り、舌を絡めて、舐め取っている。唾液を嚙下する喉が、とくと動くのもまた生々しい。

女の子独りで、起きあがりかけた姿勢で、ただじっとしているだけなのに、相手の男の姿が眼に浮かぶようだった。まるで、熟練したパントマイムだ。よそのカップルの痴態を見せつけられているような興奮に胸を高鳴らせ、私は女の子の独り芝居を見続けた。

やがて、女の子の上半身が、男の重みでやんわり押し倒されるかのように、布団の上へ仰向けに倒れて行った。「うう」と、小さなうめき声があがり、肩が揺れて、乳房が突きあがった。薄い襦袢越しに、膨れあがった乳房の、二つの突起が尖って見えた。さつきまでとは、比べ物にならないほどに量感を増した乳房は、荒くなる呼吸につれて、忙しない上下動を繰り返していた。心なしか、膨らみ

自体も小刻みに震えているようだ。

乳房自身の微妙な蠢き　　そうだ、これは錯覚なんかじゃない。この子のおっぱい、誰かに愛撫されているんだ。こうして凝視していると、愛撫する男の手の動きが眼に浮かぶ。乳房をまあるく撫で廻し、膨らみを掴んで揉みしだく、優しく淫らな動き。あつ、男の指先が、乳首の尖りを捕まえた。くりくりとよじり、尖端を軽く押し潰している。何だか、見ている私の乳房の奥までがむず痒い。乳首を弄られ始めると、女の子の呼吸はいっそう荒くなり、それに、明確な喘ぎ声が入り混じるようになった。高く、低く、愛撫のされ方によつて調子が変わるその声音には艶があり、聞いている者を、淫欲の世界に惹き込まずにはおれないような、生々しい迫力に満ちていた。

いつしか私は、女の子の横たわる姿を凝視しながら、自分の胸元を強く押さえ込んでいた。ううん、もつと正直に言えば、セーターとブラジャーの中にしまったおっぱいを握り締め、自分の手で刺激していた。女の子が、受けているであろう刺激を、自分自身でも味わおうとするかのように。

そんな私の眼の前で、女の子の喘ぎ方、身悶え方は、より物凄く露骨になっていた。腰をくねくねくねらせて股を開き、太ももを丸出しにして足先を跳ねあげたり、布団の力バーを足の指で引つ掻いたり、落ち着きなく、そうかと思えば、割れた裾前から突き出たふくらはぎをびくんと強張らせたきり、じつと、何かの感覚に耐えるかのように動きを止めたりと、その動作は予測不能で、眼を飽きさせない。もし、これを全て、私に見せるための演技としてやっているのだとしたら、大したものだ。世界中の、ありとあらゆる演劇賞を、総なめにできるんじゃないだろうか。

けれど私は、女の子のこの姿が、演技だなんて全然思っちゃいなかった。だって、どう見たって、女の子は男に抱かれていた。男に軀の隅々までも弄くり廻され、舐めたり噛んだり、息を吹きかけられたりした拳句に、両脚を高く抱えあげられて、男の、硬く屹立し

たものを、濡れきっているであろう箇所宛がわれようとしていた。この部屋にはきつと、姿の見えない、幽霊のような男が居るに違いない。処女を襲う夢魔であるそいつは、このいたいけな、離れの女の子を毒牙にかけたのだ。私が見ている、その眼の前で。

そしてついに、太ももの付け根までも剥き出しにして、大股開きの姿勢を強いられた女の子の躰が、腰を中心にして、大きく揺れた。か細い躰が、男を受け入れたのだと、はっきりわかった。

可愛い見た目に似つかわしくない、獣じみた野太い声が女の子の喉から漏れ出ていた。両脚を、婦人科診察椅子のあぶみ台にでも乗せているような格好であげ、その脚をがくんと揺らしている。いや、揺らされているのだ。始めは緩慢に、それがやがて、少しずつ速さと大きさを増して、いっそ暴力的な揺さぶりへと変化して行った。

その内に女の子は、揺れながら広がっていた脚の、膝から下を交差させ、腕を伸ばして、上から圧しかかっているのである。男の躰に絡みついた。きつく絡んでいる腕と脚の格好は、男の躰つきや姿勢、その動きまでも、くつきりと浮かび上がらせた。どちらかといえは細い躰をした男は、女の子に覆い被さって、がんがん突きまくっているようだった。直線的なその動き。それがしばらく続いた後に、ふつと女の子の腕と脚が解けて、こちら向きに、ごろんと寝返りを打った。

裾前を、お腹の下から完全にはだけさせた女の子は、うめきながら、片脚を上曲げて、横臥した。意外と濃く茂った陰毛が、黒く萌えている性器の辺りを露わにさせた彼女は、硬く眼を閉ざし、絶えることなく淫らな喘ぎ声を漏らし続けていた。けれど、「ああ」と喉を反らし、掛け布団を両手で掴んで、もじもじ腰を動かしているところを見るに、男の躰はいつたん離れたまま、繋ぎ直されていないようだ。

それでも片脚があがって股が開いているのだから、放置されているわけではないだろう。おそらく片脚を持ちあげられて、空いた方

の手で、あそこを弄くられているのに違いない。女の子の反応や声音からも、それは明らかだった。あの、切なそうな声の調子。狂おしげに眉根を寄せて、これでもかと股間をくねり廻す淫靡な姿態。もう、中が疼いて堪らないのに、入り口だとかクリトリスだかをいびり廻され、悪戯に、疼きばかりを高められている。

だけど、私にもわかっていた。こんな風に焦らされるのって、本当はすつごく、気持ちがいいの。ひりひりするような快感で、躰中がおまんこになったみたいに昂ぶって、お汁がいっぱい溢れて来るの……。

## 鬪と交わる・後

気がつくとは私は、女の子の姿を見ながら、セーターをまくりあげて両の乳房を露出させ、ジーンズの中に手をつ突っ込んで、パンティーの中の、濡れた割れ目をぎこちなく指で翳っていた。時おり乳首をこねこねしつつ、こんな、誰とも知らぬ女の子の恥ずかしい姿を目前に見ながら、おっぱい丸出しでオナニーしちゃうなんて、自分でもどうかしていると呆れるのに、でも、どうしようもないのだった。だって、こんなの見せつけられたら堪らない。骨の髄まで蕩けてしまっそうに、気持ちの良さげなセックス。もうずっと、ご無沙汰なんだから……。

そんな、飢えた躰を持って余している私よりも、さらに飢えてもがき苦しんでいるように見える女の子の股間からは、ぴちゃぴちゃとぬかるんだ音が、ひっきりなしに鳴り続けていた。どうやら、相手の男が、指だけで一回彼女をいかせてしまおうと、目論んでいるよ  
うなのだ。

「うっ、うっ」と、唸るように喘ぎつつ、首を左右に振っている女の子の気持ちだが、わたしには理解できた。きっと彼女、指だけでいくのは嫌だと思ってる。せっかく野太い、もっと奥まで満たしてくれる、遅しいのがすぐそばにあるってのに、そんな、自分だけでも賄えるような、お手軽な快樂で埒を明けたくなんかないって、躰中で訴えているのだ。

それでも、意地の悪い男は、女の子の粘膜の、上っ面だけ責め立てることを、やめはしないのだった。もはや女の子は断崖の、ぎりぎりの縁まで追い詰められ、後はもう落ちてしまっ以外にないという、のっぴきのならない境地にまで、達しているようだ。

そしてそれは、あっという間に訪れた。「ああーっ」と、何オクタープか高めの、悲鳴じみた声があがり、女の子の内ももが、強張って白くなっった。悲鳴の合間には、あん、あん、と、甘えたような

よがり声が差し挟まれ、女の子の受けている快樂の複雑さを窺わせた。

痺れ渡ったような全身の痙攣の果てに、女の子の片方の脚がはたと落ちたけど、その落ち方に、私はまた驚かされた。

女の子の太ももが、完全には閉じきらなかつたのだ。

人の頭一つ挟んでいるくらいの隙間が空いて、というか、間違はなくこれは、人の頭を股に挟んでる。つまり、女の子は、股間に顔を埋められた。男に、おまんこを舐められて達したと、そういうことだと想像された。

「あ……あああ」

我知らず、絶頂の声が口から漏れていた。あまりにも卑猥な事実を目の当たりにして、私のおまんこも、我慢の限度を超えて達したのだ。どく、どく、どく、どく、と、断続的な収縮が繰り返され、粘液を垂れ流しながら、甘い感覚が、おまんこいっぱいに行き渡った。

ぬるい快樂の余韻に呆然となる私の前では、女の子の躰が裏返され、お尻を高く掲げられて、後背位でのセックスが始まるうとしているようだった。布団を弾ませ、畳をみしみし鳴らしながら、お尻以外をべたりと布団に押しつけ、揺れている女の子の表情は、虚ろだったけど、その瞳は恍惚に潤んで輝き、喘ぎ続ける唇の端からは、唾液が溢れて、これもまた、月明かりに光って見えていた。

躰の火照りがとりあえず鎮まつた私は、改めて女の子の様子を観察した。情痴に酔い痴れている顔を覗き込みながら、腕を伸ばし、女の子のお尻の後ろに手を翳した。

当然のことながら、手に触れるものは何もなかった。女の子をバツクから姦している、見えない男の躰に手が触れ、その男に手首を握り返されたりとか、そんなことにはならなかつたのだ。

じゃあ本当に、今起きている現象は、何なのだろう？ 今度は、女の子の背後に廻って、おまんこがどうなっているか調べてみた。窓の方にお尻を向けた女の子のおまんこは、周囲を縁取る黒い毛の中から、ぱっくり割れてその全容を露わにしていた。充血して真っ

赤に染まった陰唇の中の、桃色に濡れそぼった粘膜は、黒く開いた穴から湧き出す、泡ぶく立って白濁した淫液で、どろどろに融け崩れているようだ。赤紫に膨れあがったクリトリスは、包皮を弾き飛ばす勢いで突出し、やはり、淫液を絡めてぬめり光っているし、今は真上に見えている、お尻の穴の窄まりまでも、飛び散った汁でてら輝いているのだった。

そして、私は見た。

女の子の、快樂の源泉になっている穴　白濁した体液を振りこぼしているおまんこの穴は、広がったり窄まったりしながら、何かを食い締めていた。うら若き女の子のものとも思われぬほどに黒く大きく開いた穴の形は、男のものが嵌っている形に他ならなかった。膣口から、血の色をした縁肉のぎざぎざを覗かせながら、そこをしごかれ、擦られて、虐げられるその様に、私は戦慄を覚えた。

セックスつて、こういうものなんだ。通常であれば、決して眼にすることのない、交接時の女性器の、その予想外の痛ましさに、胎内で燻っていた情欲の炎が、一気に引いてゆく気がした。

女の子自身は、しきりに快樂を訴える叫び声をあげ続けていたけれど、私にはもう、それすらも、肉食獣に下半身から食い荒らされる、哀れな雌鹿の断末魔に聞こえて仕方なかった。

「ああ、いく、いくう」

呂律も怪しい口で叫んだ言葉は、淫欲の全てを吐き出すような凄みに満ちていた。広がったおまんこの穴はぼかんと空いたままだっただけ、穴の周辺は物欲しげに震えており、会陰から肛門にかけての赤く染まった肉が、膣内の蠢動に引きずられる感じに、もごもごと上下動していた。不器用で、不恰好に見えるその動きの中では、この世とあの世を行き来するほどの快樂が起こっているはずで、それが不思議な感じだった。

永く続く絶頂の痙攣が、ようやく終わりの気配を見せた頃、女の子の大陰唇が、微かに震えた。そして、黒く空いていた膣の穴が窄まった。男のものが抜けたんだらう。

行為の名残りで僅かに開いた膣口からは、甘酸っぱい匂いを放つ、女の子の体液がどろりと溢れたけど、一瞬、その中に、あるはずもない精液の匂いを嗅ぎ取った気がして、私は軽く戸惑った。

## 御翳交

嵐のような時間が過ぎ去り、部屋には沈黙が戻った。

月に照らされる雪明りが、その沈黙を深くしていた。静まり返った部屋の中で、私はぶるつと身を震わせた。そういえば、まだおっぱいを出したままだった。

ブラジャーを直し、セーターの裾をおろし、さらに、床に散らばった小物の中からティッシュ箱を拾いあげ、ジーンズの中の、濡れた股間を始末していたら、窓から見える渡り廊下に、人影を見つけた。屋敷の方から、静々とこちらにやって来る和服姿。吉村紫だ。

間もなく離れにたどり着いた吉村紫は、無言で部屋にあがり、布団の傍らに座り込んだ。彼女は、ぼんやりとした抜け殻のように見えた。別に、着物を着崩しているわけでもないし、髪だって、こめかみのやうなじ辺りの毛が、若干ほつれて肌に張りついていただけで、それほど酷くはなっていない。

けれども、今の彼女からは、初対面の時に感じさせた、穏やかな気品が失せていた。どこかしどけなく、くたびれ果てた顔のわりに、全身からは妙な生気を発していて、何と云うか、女の生臭さを感じさせた。

この部屋の主であるところの女の子はと言えば、吉村紫が入って来ても、まるで反応しなかった。はだけた裾前から太ももまでも露出したまま、手足を投げ出し、仰向けにごろんと寝ているだけだ。ざんばらに乱れた黒髪が顔を隠しているの、起きているのか眠っているのかも判然としなかった。

そんな女の子の姿を見つめながら、吉村紫は膝をそろえて正座した。そして、畳に手をつき、ゆるりとこつべを垂れて、女の子に向かつて土下座をした。

「申し訳ございませんでした……お嬢様」

お嬢様、と呼ばれた女の子は、首を曲げて吉村紫に顔を向けた。

顔にかかった黒髪の隙間から、額を畳につけた吉村紫を眺めているようだ。

「もういい。謝られてもしょうがないし」

暫しの間を置いた後、女の子は、ぶっきらぼうにそう言った。

「私はいいけど、でも、こいつに見られちゃったよ」

女の子はすつと躰を起こすと、部屋の片隅で身を縮込めていた私を指さした。顔をあげた吉村紫は、私を見てはつと息を飲んだ。どうも、今まで私の存在に気づいていなかったらしい。

「あなた……なぜここに居るのですか」

眼を見開いた吉村紫は、咎める口調で私に言った。なぜ居るのかって言われても……何をどう話したもんだか、私だつて困っちゃう。「ここには来ないようにとお願いをしたのに。ああでも……そうです。わたくしが輔さんとあんなになっていたから、お部屋に戻れなかったのです。わたくしは、あなた様にも申し訳のないことを」

吉村紫は、何やら勝手に独り合点をして、おろおろし出した。そして、今度は私の方に向き直って、深々と頭を下げた。

「とんだご無礼をいたしましたして、本当に申し訳ございません。ですが、お願いでございます。今宵のこと、決して他言はなさらさないで欲しいのです。誰にも……輔さんに対しましても、どうか」

「いつたい、何なんですか？ 私が見たのは、何だつたんです？」

私は吉村紫に問い質した。吉村紫は目線をあげ、私の顔と、？お嬢様？の顔を、順繰りに見てから、再度私を見て言った。

「あなたがご覧になったのは、御翳交です」

「「うえい、うう？」」

「翳に交わる、と書きます。人間の家に、稀に現れる特殊な業……今様に言えば、超能力のようなものでしょうか」

吉村紫の言葉を遮るように、お嬢様が、小さなくしゃみをした。

吉村紫は、土下座をやめて腰をあげ、畳に脱ぎ捨てられていた黒い着物を取って、お嬢様の肩にかけた。そして、言葉を継いだ。

「この、さとりお嬢様は、元々人間本家のお生まれでしたが、ご幼

少の折より、御蔭交のお力を現しておられました。それがために、当主様がこのお屋敷をお建てになり、こちらにお嬢様を住まわせることになされたのです。お側仕えのわたくしを添えて……」

「それじゃあ、このお屋敷は、元々お嬢様のものだったわけですか？ 人間先生の家じゃなく」

お嬢様、こと、人間さとりを見ながら、私は言った。人間さとりは、黒い着物を掻き合せて布団に横になり、丸く縮込まって、私を見あげていた。その肩に手を添えて、吉村紫は頷いた。

「圭樹様がこちらにいらした事情は、少々込み入っております……。そもそもは、大学在学中にご結婚なさった奥様が、人間本家に入りはしたものの、ご家族の方々と折り合いがよろしくなかったことが原因だったと申しますか。」

圭樹様がご結婚早々、奥様だけを家に残し、東京の大学に戻ってしまわれたこともあり、ストレスからか、体調を崩されるようになったので、見兼ねた当主様が、奥様もこのお屋敷にやっってしまったわけです。

それ以来、このお屋敷には、お嬢様と圭樹様の奥様、お二人にお仕えするわたくしの、三人で暮らして参りました。

この度、圭樹様も奥様も三十の声を聞くようになったということ、いい加減お世継ぎの算段をつけねばならぬという理由から、こちらにお戻りになられたわけですが、当主様の直系とはいえ、圭樹様はご長男ではございません。いずれは分家なさってよそに家を構えねばならぬご身分なのです。それで、どうせなら、奥様とお嬢様しかいらつしやらない、こちらのお屋敷で気楽に過ごそうとお考えになったと。

仕方のないことではございます。元々、圭樹様も、本家のご家族や親類の方々と、そう馴染まれてはいらつしやいませんでしたから。幼くしてご両親から引き離されたお嬢様に、同情的でいらしたこともあり、本家には戻らず、こちらのお屋敷へ」

「だから、それが迷惑だって言うんだ。私は別に、寂しいなんて思

ったこと、一度だつてないのに。勝手だよ。だいたい圭樹は、私のこと何も知つちやいないんだ。あれのことだつて、ほんとには信じちゃいないんだから。そうでなきゃ、私が居る家に、夫婦で暮らしたりはしないよ」

布団の上で、ごろごろと躰を揺すりながら、人間さとりは言った。その、独特の光を放つ瞳と、眼が合った。

「それで」

私は、今度は人間さとりの方を見て尋ねた。

「それで結局、あなたのその超能力って何なの？ あなたは、生みの親からも疎まれるような、どんな力を持つてるって言うの？」

「お嬢様は、他人の受けた感覚を、自分のものとして感じるお力をお持ちなのです」

人間さとりに答える間を与えず、吉村紫が答えた。

「強い痛みや強い快楽を受けている者がそばに居ると、それが、お嬢様にも伝わるのです。本家でも、永いこと絶えていたその御業が、今になってなぜ、お嬢様の身に蘇ったのかはわからないのですが……」

とにかく、お嬢様のお近くでその……淫らな行いに及べば、それがお嬢様のお躰にも伝わってしまいます。本家には、お嬢様のご両親の他にも、人間に連なる何組ものご夫妻が同居なさつておいでなので、お嬢様が生活し得る環境ではございませんでした。仕方のないことだったので。嫡子ご夫妻であられるお嬢様のご両親は、人間本家から離れるわけにも参りません。決して、お嬢様を疎んじていらしたわけでは」

そうだったのか。私は深く納得していた。通常であれば、そんな荒唐無稽な話、とてもじゃないけど信じられなかっただろうけど、さっきのあれを目の当たりにした身としては、信じざるを得ないことだった。

「何しろお嬢様は、相当に広い範囲の影響を受けてしまいますから。同じ屋根の下では、ほぼ完全に。こうして別の建物に移った場合で

も、ここから、庭の向こう側に見える部屋ぐらいの距離でしたら、まず間違いない受けます。それなのに……わたくしは……」

吉村紫は、くたりと首を曲げて、袖口で顔を覆った。恥じらいと申し訳なさを含めて恐縮しきっている体だ。

「吉村さんが悪いんじゃないですよ。輔でしょう？ あの馬鹿が、吉村さんを、無理やり」

もう、だいたいの察しはついていた。吉村紫は、私達が宛がわれたあの部屋で、輔に姦られちゃったんだ。布団を延べている時にも押し倒されて、なし崩しのままってところか。

「輔さんのような若い方が、わたくしなどに興味を持つとは思っておらず、油断しておりました。それがあんな……お恥ずかしい限りです。」

けれど安堂さん、どうぞ、お気を悪くなさらないでくださいませね。きつと輔さんも、魔が差しただけかと存じますので」

私の顔を伺うように、吉村紫は言った。私が輔の彼女だと信じているせいか。でもそれにしちゃあ、人間さとりを通して見た限り、かなり遠慮のない快楽に耽っていたようだったけど。

「私は気にしません。それに、さとりさんのことを、よそで言いふらしたりもしませんよ」

とりあえずそう言ってあげると、吉村紫は心底ほつとしたようだった。私は立ちあがった。

「それじゃあ、私は部屋に戻ります。人間先生がご帰宅なさったら、教えてください」

そう言って、私は離れから立ち去ろうとした。

「圭樹が帰って来たら、どうするつもりなの？」

人間さとの小さな声が、私の足を止めた。振り返ると、布団の上から、黒猫みたいな女の子の眼が、私を見据えていた。

「お前、圭樹を殺すつもりなんじゃないの？」

思いも寄らぬ台詞に呆れた私は、人間さとの黒い瞳を、まじまじと見返した。私が、人間先生を殺すだなんて。この女の子は、何

を根拠にそんなことを言い出したんだろうか？

「馬鹿なこと言わないでよ。何で私が、そんなことしなけりゃならないの」

「そんなの知らない。けどお前、みんなに隠してるんがあるでしょう？」

私は何も答えずに、人間さとりを見つめ続けた。他人の受けている感覚を、自分のものとして感じてしまう能力。そんな、人知を超えた能力を有しているという、人間さとり。

彼女が他人から感じ取ることができるのは、躰の痛みや快感だけではないのだろうか？ たとえば、心が負った傷の痛みとか、そういったものまでを、感じ取ることができるのだとしたら？ それで人間先生から、一方的に別れを告げられた私の感傷も、感じ取ったと言うの？

私は、人間さとりから目線を逸らし、黙って離れを後にした。何も返すべき言葉が見当たらなかったし、下手に口を開いて、余計なことを漏らしてしまっても面倒だと思った。

部屋に戻ると、輔はもう眠っていた。明かりの消えた室内の、ど真ん中に敷かれた布団の中からは、能天気な高いびきが響いていた。襖を開ければ、向こうの部屋には、私のための布団がすでに敷いてある。

私は、私に宛がわれた方の部屋に入り、襖を閉めて、布団の上に座った。布団の傍らには、私の持って来たシヨルダーバッグと、東京から郵送して来たスキーバッグが、並べて置いてあった。

スキーバッグを引き寄せ、中身を検めようとしたところで、廊下からばたばたと喧しい足音が響いて近づいて来た。何かと思う暇もなく、廊下側の襖が開き、襦袢姿の人間さとりが姿を見せた。

## さとり

「ちよつと、何すんのよ」

私は、人間さとりが布団に入るのを許さず、肩を突き飛ばした。人間さとりは、畳にひっくり返ったけれど、特に応えた様子もなく、すぐに躰を起こした。

「ここで寝させてよ」

私を睨みつけ、ぶっきらぼうに彼女は言った。私は呆れた。何勝手なこと言つてんだ、この小娘は。

「やだよ。あんたは自分の部屋で寝たらいいじゃん」

「だって、あそこ夜中は寒いんだ。もう我慢できないよ。何で私があんな、元々物置だったようなところに追いやられなけりやならなの？　ここ、元々私の家なんだよ？　圭樹はただの居候。だって、圭樹が美也子と離れに住むべきじゃない。ねえ、そうでしょう？」

またこれだ。人間さとりの態度に困惑して、私は頭を掻いた。まるで、狼少女を相手にしているようだと思った。この子ときたら、まともな人間の社会性というものを、一切持ち合わせちゃいないんだから。箱入りのお嬢様育ちにしたって、これは酷すぎる。簡単な会話すらも成り立たないなんて。他人事ながら、将来が心配になつてしまう。

「ねえ、ちよつとでもいいの。ここに居させて。私、お前に話したいこともあるから。さっき、途中で邪魔されちゃったけど」

「何の話……」

そう問いかけてから、私は思い出した。離れで、人間さとりの？御翳交？が始まる直前に話していたこと。人間さとりは私に、人間先生を東京に連れて帰れと言っていたのだ。

「人間先生を東京に連れて行くなんて、私には無理よ。そりゃあ確かに、私、東京で人間先生とお付き合ひしてたよ。けど、あの人に

取っちゃ、私なんて、東京にいる間だけの遊び相手でしかなかったのよ……」

私は人間さとりに向かい、かなり開けっ広げに、ありのままを語り始めていた。人間先生と付き合っていたこと、学校内ではもちろん、仲のいい友達にだって話したことはなかったのに。あの輔にすら内緒にしていたんだ。眼の前で痴態を晒した彼女に対し、気安い気持ちになっていたせいだろうか。

私は、眼の前に居る電波系和風少女に、先生との間のわだかまりを、滔々とぶちまけ続けた。私と付き合っている間、人間先生は、私とのことが周囲にはれないようかなり気を使っていたこと。私にも、他人に言い触らさないよう釘を刺していたこと。それでいて、自分に奥さんが居ることを私に隠していたこと、等々。

こうして改めて話しをすることで、私の置かれていた状況を、客観的に捉え直すことができた。私が入間先生に受けていた扱い。やはりどう考えたって、私は彼から愛されてなんていなかった。東京に居る間だけの、性処理相手。現地妻。せいぜいがそんなところだろう。

「圭樹も、男だからね」

人間さとりは、畳に寝転がって頬杖をつき、物憂い顔で呟いた。ガキんちよの癖しやがって、大人のような物言いをする。

「だけど圭樹はさ、ほんとは臆病者なんだ。結婚してるのに他の女に手を出したりとか、ほんとはできない性格なんだよ。なのにそれをやったんだとしたら、それは、お前のことを、よっぽど気に入ったからだと思う。きっと、凄く好きになったんだ。それで、何もしないではいられなくなった」

「そんなこと……何も知らない癖に……」

私の返事には、ぐずぐずと鼻をすする音が入り混じっていた。情けないことに、私は人間先生の話をしながら、泣き出していたのだ。

なんだかんだ言っても、まだ未練が残ってるのかもしれない。も

う、完全に諦めたつもりだったのに。私は、自分で自分の本心がわからなくなった。

「もう一度、二人で話をしてみたら？」

追い討ちをかけるがごとく、人間さとりは囁いた。私は、手の甲で涙を拭いた。人間先生と、二人きりで話をする。それでどうにかなるものだろうか？ 田舎の旧家の息子で、妻帯している三十歳の男が、東京で半年ばかりの間、週末の夜と朝を、同じベッドで過ごしただけの女子大生の言いなりになって、家を捨てるなんてことをするものかどうか。 どうも、考えることすら馬鹿げているように思える。だから私は、首を横に振った。

「話したって無駄だよ。人間先生が臆病者ならなおのこと、家を捨てて若い女と東京に戻ったりはしないでしょ」

「んもう！ 何でそうマイナス思考になるかなあ！」

人間さとりは、いきなり大声で叫んだ。そして、びっくりしている私に掴みかかり、布団の上に押し倒した。

甘い匂いのする少女の躰が、異様な熱気を発散して、私の上に乗っていた。たんぽぽの茎のように真っ直ぐな、か細い両腕が、私の躰を押さえつけた。

「ちよつとちよつと。何をするつもり？ 放しなさいよ」

人間さとの腕を掴んで、私は言った。けれど、細い腕は思いのほか強情だ。それはセーターの裾から中に入り、ブラジャーの中心まで這い込んで、私の乳房を直に握った。

乳首に、予想外の鋭い快感が走り、私はとっさに声を漏らした。

「乳首、勃起してる」

耳元で囁いた人間さとりは、私の乳首を指先で擦った。彼女の言う通りだった。乳首の尖りが、ひんやりとか細い指先を押し返しているのを感じた。私の意志とは関係なしに、硬くなって突き出しているのだ。何でなのかわからない。さっきしたオナニーの火照りが、まだ身の内で燻っていたのだろうか？

けれど、それにしただって、こんな風に、田舎の小娘風情に弄くら

れて、感じちゃうのはいただけない。私、そっちの趣味なんてないんだもん。

それに私、こんなことをしている場合でもないんだ。こんな、人間先生が奥さんと暮らしているその家で、幼い少女とレズごっこに耽るなんて、おめでたいにもほどがあるってもんだ。

「やめろつての！ いい加減にしないと、本気でひっぱたくよ！」  
やっこのことで人間さとの手を引き剥がした私は、もういっぺん突き飛ばしてやった。またも畳にひっくり返った人間さとの裾前は広がり、パンツを穿いてない下半身が丸出しになった。

「やっぱ駄目か」

躰を起こした人間さとりは、しょんぼりとうな垂れながら呟いた。  
「さつき、私を見ながら自分でやってたから、ひよっとしたらつて思っただけど……そうだよ。女の子が好きな訳ないよね。圭樹と付き合ってたんだから」

「そうだよ……だから、さつきと脚を閉じて、その、毛も生え揃わない未熟なアソコもしまつてよ」

ロリコン親父なら、大枚はたいてでも拝みたがるような光景から眼を逸らしつつ、私は言った。でも例のごとく、人間さとの耳に入ってはいないようだった。

「だったら、しょうがない。もう、これだけは、やりたくなかったのに……」

口の中でぶつぶつ言いながら、人間さとりはさらに大きく股を広げた。そして、股間の割れ目に、手を宛がった。

## 快樂縛り

白い指先が、ぎこちない動きを始めてから間もなく、異変が起こった。股間の中心部分から、激しい感覚が湧き出てきたのだ。それはもう、誤魔化しようもないくらい、確実に。

「いやっ？ 何これ？」

ジーンズの上から股間を押さえ、私は叫んだ。人間さとりは無言で私を見据えたまま、指先をもぞもぞと蠢かせて、自らの性器を弄くっていた。片腕を畳について躰を支え、M字に脚を広げた下半身を前に突き出すような姿勢を取って、ただひたすら、おまんこを弄って見せつけてくる。膣口から滲み出てくる体液をすくい取ってはクリトリスに塗り込めるといふ、単調にして確実な責め方。

正直、肝心な部分は、彼女自身の手が邪魔をされていてあまり見えないのだけど、そこがどんな風に弄られているのかだけは、よく伝わっていた。

なぜならそれは、伝わっているからだ。私の躰に。直に。人間さとりがオナニーで得ている、快感が。

人間さとりは、他人の受けている感覚を自分の身で受けられるのと同じように、自分の受けている感覚を、他人に分け与えることもできるに違いない。彼女の指先が、尖った肉の芽の裏面をさすり、尿道口の辺りを刺激しながら下へおり、膣口の疼きを突きにかかると同時に、私自身のその部分にも、全く同じ感覚が、痺れながら蕩けるような快感が、容赦のない勢いで、がつんがつんと打ち込まれる感じなのだ。

為す術もないまま、私は布団に仰向けになり、股間を両手で押さえ、身悶えた。人間さとりが喘ぎ出すと、私の口からも、同じように喘ぐ声が漏れ出でた。

驚いたことに、隣の部屋からも、同じタイミングで野太い声が聞こえていた。どうやら隣で寝ていた輔にも、人間さとの快感が伝

わってしまったようだった。

ああでも、なぜ。どうして。

快樂にぼやける頭の中で、私はその言葉ばかりを繰り返していた。人間さとりがこんなことを始めた理由が、皆目わからなかったからだ。

さつきは私にレスプレイを仕掛けようとしたと思えば、今度は、こんな……。私に対し、それこそレスビアン的な関心でも抱いているというのか。あるいは他に、何か目的でも？

布団に横たわって喘ぎ、身悶える一方で、自問自答に耽っている私の背後で、部屋の襖の開く、微かな音が聞こえた。隣の部屋の襖じゃない。廊下側のだ。

入ってきたのは、吉村紫だった。

吉村紫は、人間さとの快樂を受けてはいないのか、普段通りの様子でこちらへやってくると、私の布団のそばで身を屈めた。霞んだ目をなんとか開けて、私は吉村紫を見た。吉村紫は、私のスキーバッグを手に取って、どこかへ運び去ろうとしている様子だった。

「何を……するの」

私は腕を伸ばし、吉村紫の着物の裾を掴んだ。吉村紫は、スキーバッグを両手に抱えたまま、振り返って私を一瞥した。白い顔が、夜目にも鮮やかに紅潮しているのが見て取れた。瞳も潤んで黒く輝いている。多分彼女も、人間さとの影響下に居ないわけじゃないのだろう。私や輔と違い、普通に行動できているのは、人間さとの力に耐性があるのか、はたまた慣れてでもいるのか。

吉村紫は、着物の裾を振って、掴んだ私の手を振り払うと、スキーバッグを抱えてすたすたと部屋から出て行ってしまった。追って行ってバッグを取り返したいのだけど、この身に注ぎ込まれる快感が、それを許してくれない。

クリトリスを派手に震わせる感覚が不意にきて、思わず腰を仰げ反らせた。

人間さとのオナニーは、幼い女の子らしく、拙くも単調なもの

だったけど、得ている快感はやたらに鋭くて、抗い難かった。やめたくとも、後を引いてやめられない、止まらないってこの感覚は、覚えて間もない頃のオナニーの快感そのもので、私なんかはもう、とうの昔に失っているはずのものだった。

こんなにも鮮烈な快感　もう、瞼も開けていられなかった。しかも憎たらしいことに、人間さとりは、オナニーの快感を自らコントロールしているようなのだ。性に目覚めて間もない躰は刺激に敏感で、ちよつと擦っただけでもすぐさま達してしまえるというのに、あともうちよつとでいく、って段になると、快感を高める指の動きを止めて、膨れて煮え立つた粘膜をなだめる動きに変えるのだ。

快楽の限界を伸ばせるだけ伸ばし、少しでも長く、私をここに足止めをしようって魂胆だ。

そうだ。私にはもうわかっていた。人間さとりは、吉村紫と共謀して、私の手元から、あのスキーバッグを引き離そうとしているのだった。

なぜそんなことをする必要があるのか……。こんな酷い快楽に、腰から下を浸されている状態で、まともに思考が廻るもんでもないけれど、それでも、なんとなく理由のあたりはついていていた。

このままじゃやばい。

身をよじり、床を這うような格好をしながら、私は人間さとりに近寄った。人間さとりは、畳に仰向けになり、ぴんと伸ばした両脚を、八の字に開いた状態で、濡れきって雌の匂いを発している割れ目の肉を、柔らかく揉んで小休止に入っているところだった。

快楽の波が微弱になっているのを幸いに、私は人間さとの下半身に取りつき、肝心の場所に宛がっている手を、払いのけた。そして、暗闇の底で、生々しい匂いと熱を発している場所に、唇を押し当てた。

「あ……ああっ」

人間さとりが、驚き混じりの声で叫んだ。私は心で気合を入れ、硬く眼を閉ざしながら、口につけたものを舐め始めた。上下になぞ

り、肉の芽の強張りを舌先でくすぐってから、落ち窪んだぬかるみを、尖らせた舌先で軽くつついた。

たったそれだけだった。それだけで、人間さとりは呆気なく達した。甲高い悲鳴じみた声をあげ、子供の癖に、尿道口から潮らしきものまで噴き出しながら　鼻柱にかかるそれを避けたかったけれど、無理だった。なぜって、私も彼女と同じように、叫びながら潮を噴いていたから。

まあ、潮の方は、人間さとの感覚が伝わってきただけの、ただの錯覚だったようで、下着を汚さずには済んだので、ほっとしたけど。

とにかく、オルガスムスに達してぐったりとなった人間さとりをその場に残し、私は急いで廊下に出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0057ba/>

---

翳に交わる

2012年1月2日05時46分発行